

世界は変わり続ける

——『わが悲しき娼婦たちの思い出』論序説——

久野量一

駅前で見慣れた小さな商店街に気がつくや巨大なスーパーマーケットができている。どう見ても今までの風景にそぐわない。人の流れも変わり、穏やかでのんびりしていた通りがよそ者であふれ、騒々しくなっている。そういうとき、かつてのゆるい空気に馴染んでいた者はふと「世界は変わった」とつぶやいてしまう。しかしよく考えてみればわかることだが、いまわたしたちが生きている世界の変化についてより真実に近い表現は、「世界は変わった」ではなく、「世界は変わり続ける」だろう。スーパーマーケットはのちに巨大古本チェーン店になり、その店舗が別のところに移転したあと、同じ場所に電化製品のチェーン店ができたりするのだから。

にもかかわらず、「世界は変わった」と口をついて出てしまうのは、あわただしい変化についてゆけず、昔を懐かしむメンタリティがあらわれているからだ。そういう過去への郷愁にとらわれるのはある程度年齢を経た人間だろう。だいたい30歳を過ぎればだれでも一度はこうした感覚を抱いたことがあるのではないか。祖父や祖母も死んでゆき、場合によっては親も死ぬ。家族がいなければ世界にたったひとり残され、いざ見回してみると、かつての居心地のよい空間はない。なぜ自分を置き去りにして世界は変わってしまったのか。個人的に反抗を試みても多勢に無勢で、結果的にどうしても「昔」と「今」の違いばかりが目につき、口を出るのは「世界は変わった」なのだ。こうした過去への郷愁はしばしば、失われた過去の回復——「伝統」の創造——という欲望とセットになる。

ガブリエル・ガルシア＝マルケスが77歳という老境にさしかかって出した中篇『わが悲しき娼婦たちの思い出』（2004）は過去への郷愁、「昔」と「今」の違いを痛切に感じ、挫折感とともに生きる老人が主人公の物語である。著者のガルシア＝マルケスについて多くの説明は要さないだろうが、この小説が川端康成の『眠れる美女』から一節をエピグラフに引いていることは指摘しておこう。かねてからガルシア＝マルケスは川端のこの小説に魅了された経験と自分の体験をベースにエッセイや短篇を書いてきたが¹⁾、この小説ではストーリーをさらに具体的に展開させている²⁾。

川端へのオマージュとも言えるこの作品で筆者が注目したいのはしかし、以下の点である——主人公の男は世界の急速な変化に抵抗し、受け入れないまま老境を迎える。しかしその彼が90歳にして世界を受け入れ——したがって「世界は変わり続ける」ことを理解して——、またその世界に参入することを決意する。主人公に失われた過去の回復というようなある種の幼児回帰願望はなく、彼は変わり続ける世界に自らを位置づけようとするのである。

小説は90歳の老人の手記という体裁をとり、そのなかで19世紀と20世紀との断絶、過去への郷愁、そして変貌する都市などをめぐり、過去と現在を行き来しながら主人公の心境がつつ

られ、それらを通じて主人公にとっての未来への思考の足がかりが生まれている。本稿では手記の内容を整理して物語の舞台や時代背景、主人公の立場を明確にしながら、語り手の「私」がいかにして挫折から希望を見出すのかを跡づけてみたい。

物語の舞台は南米コロンビアのカリブ地方の「街」である。作者は街に名前を付していないが、近隣にある都市としてカルタヘナ・デ・インディアスやサンタ・マルタに言及していることや、「街」の通りの名前などさまざまな固有名詞から判断すると、実在するカリブ沿岸の都市バランキーリヤである。舞台が「都市」バランキーリヤに設定されていることの重要性は後述する。

主人公の男は、イタリア人の母とコロンビアのカリブ地方に生まれ育った父のあいだに1870年に生れた。クラシック音楽の演奏家だった母を失い、公証人だった父も主人公が32歳のときに亡くなり、ひとり取り残される。教育熱心で比較的裕福だった両親のおかげもあってギリシャやローマの古典、スペイン文学に造詣が深い。母が手を回して新聞社の海外ニュースを配信するセクションに職を得て、コラムも執筆する。それ以外にも、ラテン語とスペイン語を教える暮らしを立てる。趣味といえば音楽で、家でクラシック音楽を聞かすが、週末になるとヨーロッパの演奏家によるクラシックのコンサートにも出かける。美術展に足を運ぶこともある。

12歳で娼婦を相手に初体験を済ませ、新聞社で仕事をするようになってからもこっそり娼館に通いつめ、常連客として表彰されるほどだった。その後、上流階級の女性と知り合って婚約まで話は進んだが、結婚には踏み切れないまま独身を貫き老いを迎える。

そんな彼が90歳の誕生日を前に数十年ぶりに娼館の女将と連絡をとる。90歳を記念して処女の娘を相手にしたいと思ったからだ。首尾よく見つかった14歳の少女をいたく気に入った彼はすっかり虜になり、以降数か月のあいだ、その少女との逢瀬を楽しむ。といっても少女は昼間の仕事で疲れて眠りこけていて、彼は添い寝をするだけで彼女と肉体関係はもたない。その後、娼館に殺人事件が起きると女将は姿を消して少女との連絡もとれなくなり落胆の日々を送る。

一か月が過ぎてようやく女将と連絡がとれて少女と再会すると、少し見ないうちに少女が成長していることに愕然とする。最初はその成長を受け入れられなかったが、少女への思いを断ち切れず通い続ける。知り合ってから一年、91歳の誕生日が近づくと体調に不安を覚え、死を怯えた主人公は誕生日前日の夜を少女と過ごすことにする。しかし少女と過ごした翌朝、彼は晴れやかに目覚め、百歳まで生きてゆけるものと確信して物語は終わる。

主人公は1870年生まれだから、19世紀に青春期を過ごし、20世紀を迎えるのとほぼ時期を同じくして父を亡くしている。それと同時に「街」に近代的な技術や制度、文化が流入して大発展を遂げる。20世紀前半（1940年代後半くらいまで）がこの街のもっとも華やかなころで、その後、国内情勢が不安定になり、軍人が街を警備したり新聞社に検閲官が入り出す緊張感のある時代がやってくる。物語上の「現在」である主人公が90歳になる1960年ころはやや不穏な空気が蔓延している。その象徴が、主人公が巻き込まれた娼館での殺人事件である。

主人公はどんな人物だろうか。先に述べたように母はイタリア人、父はコロンビア人である。高い教育も受けているし、街を歩いていれば「先生」と声をかけられる、街の名士といったいい存在だ。いったん結婚寸前までいった恋愛相手も上流の出である。風貌の醜い主人公と魅惑

的な女性の結婚話が整ったのは家柄がマッチしていたからに違いない。愛読書としてスペインのペレス＝ガルドス (1843-1920) の『国史挿話』を挙げているが、この作家が19世紀スペインの大御所作家のひとりであることを押さえておこう。趣味で聴くクラシック音楽として挙がるのもショパンやワーグナーやシューマン。したがってこの主人公は、19世紀のヨーロッパ的な教育を受け、ヨーロッパ的感性で新大陸を見るクレオール白人男性とみていいだろう。新大陸においてクレオール白人男性が歴史的に特権的な地位を占めてきたことは明らかだ。たとえば主人公は、旧大陸のスペイン語を「カスティール語」と言い、一方で新大陸のスペイン語を「土着の言語」と言っている。彼が学校で教えるのはもちろん「カスティール語」である。主人公からすれば新大陸の言語と正統カスティール語は異なる言語と映っているのだろう。

19世紀と20世紀の差異を際立たせるトポスとして設定される「街」はどういう場所なのか。この「街」はマグダレナ河がカリブ海にそそぎこむ場所であり、二つの港がある。ひとつは河口のボカス・デ・セニサから入る河川沿いの港であり、もうひとつは河口とは少し離れたところにあるカリブ海沿岸に建造されたプエルト・コロンビアという棧橋である。この両方の港に大西洋やカリブ海を渡った船がやってきて荷を下ろす。この港はさまざまな新技術、新製品などがもたらされる交易の港として機能し、「街」もまた交易の都市として栄える。このように描かれる両方の港は現実にはバランキーリヤに備わっている。だからこそ舞台はバランキーリヤにほかならないのだが、その史実と引き合わせてみると、「街」の19世紀と20世紀の差はひとときわ説得力が増す³⁾。

バランキーリヤは20世紀の前半、コロンビアでもっとも進んだ「近代都市」として知られている。この街（および港）はコロンビアにとって世界に開かれた扉だった。バランキーリヤは当時、「コロンビアに開かれた黄金の扉」と呼ばれ、世界中のさまざまな新しい潮流がもたらされた都市だった。航空技術、各種近代スポーツ、港湾技術、道路整備、文化運動などをこの街が先進的に受容した。地理的にカリブ海に面していることもあって、アンティール諸島との人的交流も盛んだったし、第一次大戦 (1914-18)、スペイン内戦 (1936-39) などの影響でヨーロッパから多くの移民が逃げ込んだ避難所でもあった。アラブ系の移民も数多くこの土地を踏み、定住している。アメリカ合衆国の文化との関係も強かった。バランキーリヤ史に引きつけて読めば、主人公の母のイタリア人はこうした大移動が起きる直前の19世紀の後半、この街の勃興期に移住してきた第一世代のヨーロッパ人たちのひとりということになる。

主人公がどのように20世紀初頭を振り返っているかを引用しよう。

進歩が街の神話になった。すべてが変わった。飛行機が飛ぶようになり、進取の気性に富んだ男がユンカース [引用者注：ドイツの貨物航空機] から郵便袋を投下して、エア・メール業を創始した。

ただひとつ変わらなかったのは私が新聞に書いていたコラムだった。若い世代は打倒すべき過去のミイラを前にしたように私のコラムに噛み付いたが、私は断固同じ調子で書き続け、革新の空気に抗った。私はすべてに耳を閉ざした。私は40歳になっていた (中略)。当時の編集長にオフィスに呼び出され新しい風潮に合わせて書くように命じられた。彼はまるで自分が思いついた言葉のように厳粛な口調で言った。世界は進んでいる⁴⁾。

舶来の物にあふれ、活気づく街では直線的な進歩観が支配する。そのなかで主人公はただひとり過去にしがみつく。新聞社で用いられるライノタイプの印刷機の文字に対しては手書きのフローレンス風の文字。大衆音楽のポレロに対してはクラシック。あくまで19世紀にこだわる男と、大衆に席捲される20世紀的な世界という構図である。

主人公が20世紀世界に参入できないことを決定的に示すのは、破談にした恋愛結婚のエピソードである。主人公の母は遺言として、若いうちに白人と結婚して子どもを三人はもうけ、母が代々受け継いでいるイタリアの名前をつけてほしいと残す。男は、母の言う「若さ」を都合よく解釈して婚期を繰り延べにしていたが、ついにヒメーナという上流階級の出の女とエロチックな遭遇をしてしまう。その後、主人公の抵抗もむなしく、ヒメーナが主導して有無を言わず婚約まで話は進む。婚約した年齢が何歳のときは明示されていないが、前後関係から判断すると30代前半ぐらいだ。

開放的で積極的、そして強い女。このヒメーナを20世紀的な女性だと解釈してよいだらう。主人公はこの女に翻弄されて婚約までする。彼女と結婚して30代を、すなわち20世紀を始めるという手もあったはずだが、彼は破談にしてしまう。しかも結婚式の当日に欠席するという、婚約相手ヒメーナに最大級の屈辱を味あわせてでも、「何か取り返しのつかないことをしている気がして」結婚を取りやめにしている。主人公はことごとく父や母とともに暮らした19世紀にこだわり、20世紀に順応しなかった。

世界は変わってしまった。20世紀に入ると主人公の「名士」としての地位は没落する。彼が住んでいるのはもともと19世紀に父が買ったコロニアル様式の屋敷で、一階をイタリア人に貸し、二階を住居にしていた。場所はクリストバル・コロン像が据えられたサン・ニコラス公園に近い。大聖堂との位置関係からこの公園は植民都市につきものの、いわゆる「中央広場」だと考えられる。ということは主人公の住居は植民地時代には街の中心、すなわち一等地だったに違いない。ところが20世紀になるとその近辺では金管楽器の楽隊がさびしげなワルツを演奏したり、路上に並んだタクシーの間で男たちがサッカーの話題を大声で話すようになる。貧しい娼婦たちもうろろしている。楽隊は物乞いだと考えられるし、サッカーをネタに話をやめない男たち——おそらく週末のサッカーくじが話題の中心だ——はタクシー運転手や港湾労働者だろう。20世紀の到来とともに、かつての一等地はいわば場末、植民地時代の趣などをいっさい感じさせない地区に変わり果てたわけだ。19世紀に父が働いていたコロニアル様式の建築物である由緒ある公証人事務所も落ちぶれてしまった。植民地時代から住んでいた住人は20世紀になると次々に去って娼婦が根城とするのだ。

経済的にも没落の一途をたどる。金に困った主人公は自分の母の遺産を現金に換えようとするが、宝石類を鑑定してもらったところ偽物だと断定されて二束三文にしかない。同じく母から高価だとさんざん聞かされていた絵画も安価で売却するしかない。父の代から引きついでいる蔵書、これさえも地元の図書館では引き取ってくれない。新しい時代になると、主人公がその価値を認め、信じていたはずの、おもにヨーロッパ的な価値観を代表する絵画や宝石、蔵書はまったく無価値になっている。19世紀的な価値観とはまったく異なる世界に主人公は放りこまれる。

20世紀世界の登場人物もこれまでとは一変する。ひとりになったときから家政婦としてきてもらい、肉体関係をもっているダミアーナは出自不明の「インディオのような女」で、この女はスペイン語のつづりを「カスティーリャ語」として「正しく」書くことができない。レストランで魚フライを揚げているのは黒人女性であり、宝石商はベドゥイン人で、街の郊外の農園で汗を流しているのは東洋人である。街はずれにはレバノン人が経営する大規模な縫製工場があり、そこでは無数の少女が女工として働いている。病院に行けば大量の患者がところせましとベッドを並べ、廊下には精神病者がふらふらとさまよっている。街路では無慈悲にバスがうなりをあげる。静かな街、顔みしりだけでのんびり過ごしていたかつての街にはよそ者があふれている。このクレオール白人は20世紀がもたらしたこれらの他者を前にしてたじろぎ、彼らとまったくコミュニケーションがとれないままだった。

もっとも、このような人びとと主人公が出会えたのも、また、これらクレオール白人にとっての他者の存在を保証したのも外に開かれた「都市」という空間である。職種や階級などが厳格に規定されている伝統的農村社会（あるいは植民地時代の構造を保持している社会）では、こうまで大っぴらに主人公は売春宿に通えなかっただろうし、他者がここまでむき出しになる可能性は低かっただろう。主人公が、自分が属する世代や階級とは異なる他者と否応なしに直面することになったのは「都市」だったからである。

変貌する都市で経済的にも文化的にも没落してゆくポスト植民地社会のヨーロッパ風貴族⁵⁾。この小説は最初に指摘したように、その没落貴族である老人が90歳を前にして書き始める一人称の回想記という体裁になっている。語り手は1870年生まれだから1960年ころが物語上の「現在」である。主人公は老いを実感し半ば死を予感して、この世に別れを告げようとして都市に出て都市を眺め、そしてその経験を手記に記していった。挫折とともに始まった手記が、最後に明るい未来を予想させることから、この語り手は都市を周遊し、その経験を言葉にしていくことで「世界は変わり続ける」ことを理解して、自らその世界に参入していくことを決意したものと読める。その布石となったと考えられるいくつかのエピソードがある。以下は娼婦の館に赴くために主人公が貧民街へ足を運んだところである。

私は貧民街に入ったが、以前に知っていたのとはまったく違う街に変わっていた。熱い砂の道のただびろい通りに、ドアは開け放たれ、壁は粗板、屋根はヤシの葉で葺いただけ、中庭は砂利という家々が立ち並ぶのは変わっていなかった。しかし、住んでいる人たちは静けさを失っていた。大半の家では金曜日になるとどんちゃん騒ぎをはじめ、太鼓や皿を叩いて腹の底に響くような騒々しい音を立てていた。(中略)めかしこんでいた私はその場所にのみこまれるのではないかと気がかりだったが、だれも私を気に留めなかった。ただ、家の玄関先に腰をおろし、まどろんでいた痩せたムラート(引用者注:白人と黒人の混血)だけが私に目を留めた。

「じゃあな、先生」大きな声で私に親しげに叫んだ。「気持よくなってこいよ」
礼を言う以外に私に何ができたというのか？

通りも家も同じ質素なまま、かつての19世紀の風景が広がっている。しかし昔の静寂は失われ、騒々しい地区になっている。外観はそのままで住民が入れ替わっているわけだ。騒いでいる人たちに照らすと、どう見ても自分はその地区に似合わない。よそいきの格好をしている自分をねらって群衆が襲いかかってくるのではないかと恐れすら抱いている。かつては白人地区だった地区に別の肌の色の人が住むようになったのかもしれない。娼館に行くのを見透かされたムラートに下品な言い廻しで迫られた主人公だが、そのことがむしろ彼をほっとさせる。だから彼は礼を言うのだ。

新しい世界の住人との生々しい会話によってその世界への参入の契機が生まれている。街にあふれるタクシーの運転手たち、うろつく娼婦たち、軍人たち、そうした「よそ者」との会話の積み重ねが主人公を後押しする。

主人公はマグダレナ河の河口のボカス・デ・セニサにでかける。河口付近は人工の防波堤が伸びていて、その防波堤沿いに電車が走っている。この河口は先に述べたように20世紀初頭に世界との接点だった場所だ。その電車で主人公は、昔付き合いのあった娼婦で73歳になったカシルダ・アルメンタと数十年ぶりに偶然再会する。彼女は結婚して農園を営んでいるという。

海に通じる道路わきの丘陵に東洋人たちが働いている農園があり、その家まで彼女に連れられて行った。シダと、葉の生い茂るアストロメリアにとり囲まれ、軒先に小鳥の籠がぶらさがる日陰のテラスがあって、そこに並ぶ砂浜で使うチェアに私たち[主人公とカシルダ]は腰をおろした。丘陵の裾野では農園で働いている、円錐形の帽子をかぶった東洋人たちが焼けつくような陽射しの下で野菜の種をまいているのが見え、その向こうにボカス・デ・セニサの灰色の海が広がっていた。

カシルダは東洋人と結婚し、河口近くの丘陵に屋敷を構え、農園を営んで幸せに暮らしていた。自分と同じように過去への郷愁にとらわれてもおかしくないカシルダの転身はクレオール白人として19世紀を知り、生きた主人公にとっては予想もつかないものだろう。植物やテラスや農園などは19世紀とさほど変化はないのかもしれない。しかしそこで働く人びとはかつてとは違う東洋人だ。ボカス・デ・セニサ付近は海と河がすぐ近くに迫る貧困地区でもある。道路も舗装されていない。だから農園といってもそれほど広くはない。限りある狭い土地で、カシルダと夫は東洋人を雇い、野菜を売買して生計を立てているのだろう。つましく暮らすカシルダと東洋人の夫、そして労働者たちと、「世界の入口」であるボカス・デ・セニサの河口を主人公は見ている。海の水と河の水が混じり合い、水の色がとどまることなく変わり続けている。この後、カシルダと主人公の二人はもう一つの港プエルト・コロンビアにでかける。

私たちはぼろぼろになった栈橋の正面で昼食を食べた。ボカス・デ・セニサが浚渫される前は、その栈橋から世界全体が入ってきたものだった。シュロ葺きの小屋に腰をおろしたが、そこではでっぴり太った黒人の中年女たちがココナツライスとバナナスライスを添えた白身魚のフライを出していた。

ほぼ同じような光景がもう一度繰り返されている。栈橋が朽ち果てているところに時間の経過が示されているが、その栈橋付近に並ぶ食事処で働いているのは黒人女たちである。プエルト・コロンビアという「街」のもう一つの玄関口と、それを背景にした黒人女たち。カリブ海に臨み、強風の吹き荒れるプエルト・コロンビアの海もまた止むことなく波が打ち寄せている。

どちらの場面でも東洋人たち、黒人たちは遠景に退き、主人公が彼ら彼女らと言葉を交わすことはない。しかしこれらの場面は先述したムラートや娼婦やタクシー運転手との会話などと同様に、主人公にとって、いままで受け入れたことのなかった、そしてだからこそ気づけなかった人たちとの出会いを物語ってはいる。彼らがいまようやく彼の目の前に現れた、その事実を示すものとしてこの語りを読むことができる。

農園のテラスにいる主人公とカシルダの二人が海を眺めていると、白い大西洋横断船が入ってくる。二人はその船が見えると会話を中断して、しばらくそのまま黙りこんでしまう。進んでゆく船を眺めて二人が沈黙するこの場面は小説のなかでもっとも印象的な個所のひとつである。

灰色のカリブ海と泥の色をしたマグダレナ河がぶつかりあう場所だから、波も高い。だから船の操縦は慎重になる。太陽が強烈に照らすなか、真っ白の大西洋横断船がゆっくりと流れに抗うように進んでくる。この船は何を運んでいるのか。カシルダにとっては幸せを運んでくれた船であるに違いない。たぶん船に乗って夫を含む東洋人がこの地に渡ってきた。東洋人は働き者だとこの土地では言われているかもしれない。カシルダは船を見つめる沈黙のなかで自らの不幸からささやかな幸福へのストーリーを回想しているのだろう。一方、主人公にとっては、自分の安寧を揺るがした、不幸をもたらしたようにも見える船だ。主人公は沈黙のなかで幸福から不幸への転落ストーリーを回想しているかもしれない。白い大西洋横断船は二人にとっての20世紀に対する思いのずれを浮かび上がらせながら港に向かって進み、汽笛を鳴らす。

変わりゆく水の色、打ち寄せては返す波、東洋人たちの汗、黒人女たちの給仕の動き、そしてそこに重なるようにしてゆっくり動く船を主人公は眺めている。この風景に「世界は変わり続ける」という流動的な世界観のメッセージを見出すことは可能だろう。動き行く船を見て思わず主人公が黙り込んだ瞬間は、この「街」にとっての固有の文化（植民地文化）の解体とその先に起き続ける変貌に、はじめて主人公が身を預けようとする瞬間でもあるだろう。

14歳の処女の娼婦と主人公は会話を交わすこともできなかった。この少女は日中、200個のボタンつけの仕事をし、夕方になると家に戻って幼い弟や妹に食事を与え、夜は身体の不自由な母親を寝かせ、それでもなお金のために夜の仕事をやらざるを得ない。おそらく父親はいないだろう。農村部から職を求めて都市に流れ着いたいわば流浪の民である。仮に少女が目覚めていたとして、主人公にどんな話ができただろうか。しかし、この船の場面ののち主人公は、14歳のこの少女の元へ再び赴くことを決意するのである。

この物語を通じて明かされるのは、都市という開かれた場所では過去が徹底的に解体されるということだ。そしてこの都市はクレオール白人、植民者の眼差しをもつ者にとって経済的にも文化的にも没落を余儀なくさせる過酷な場所である。たとえばこうした経験はラテンアメリカの農村部ではさほど起きなかったはずだ。農村部では20世紀に入っても階級や人種を主軸に

した植民地社会（タテ社会）の構造が維持され続け、既成の価値観が解体されにくかったからだ。都市という場所だからこそ、クレオール白人は落ちぶれ、過去がずたずたになっていくのを知るのである。このクレオール白人が母の文化的伝統にすぎるとしても、そのありかは別の大陸であり、取り戻す伝統はこの街にはない。そもそもそれを伝統と見なす人びとさえ、もはや見当たらない。このことがまた主人公を新たな世界への参入を促す契機となっているに違いない。

20世紀にこうむった社会的変容によって、都市はディアスポラの生を生きる人びとが会う場所になっている。そこでは人びとは「個」ではなく「集団」として生きている。20世紀的世界を占めるのは、必ずしも高い教育を受けて文学や音楽や絵に親しみ、新聞に署名してコラムを書くような「個人」ではない。匿名の、場合によっては名前をもたぬ「集団」として存在する人びとである。国籍、肌の色、階級、性別、年齢、言語によって社会が区分され、構造化されているわけではない。そういったアイデンティティをはがされた人びと同士の出会い方がフラットな空間配置で行われる。もちろんこの都市という場所が主人公にとってユートピア的な社会なのかどうかはわからない。街を巡り、かつては見たことのない群衆たちを目にし、わずかではあれコミュニケーションをとり、その経験を言葉にしていく。肉親の死が通過儀礼にならなかったこの孤独な主人公はこの手記を通じて、新しい世界の在り方を把握する。90歳になっていたとしても、なお新しいアイデンティティ形成に参入する。「世界は変わった」ではなく、「世界は変わり続ける」という流動的な生を引きうけようとするのである。

注

- 1) エッセイは“El avión de la bella durmiente” (*Notas de Prensa 1980-1984*, Mondadori, Madrid, 1991, pp.314-316.[高見英一訳「眠れる美女の飛行機」, 『波』1983年1月号])。短篇は“El avión de la bella durmiente” (*Doce cuentos peregrinos*, Diana, México, D.F., 1992, pp.79-89.[旦敬介訳「眠れる美女の飛行」, 『十二の遍歴の物語』所収])。なおエッセイと短篇の原題は同じだが、内容は若干異なっている。
- 2) 『眠れる美女』と『わが悲しき娼婦たちの思い出』に関する比較研究には、花方寿行による「ガブリエル・ガルシア＝マルケス『我が哀しき娼婦たちの思い出』と川端康成『眠れる美女』——コラージュと変奏——」, 静岡大学人文学部翻訳文化研究会, 2006, pp.21-43がある。
- 3) バランキーリヤ史に関するものとしては、たとえば以下のものを参照した。Posada-Carbó, Eduardo, *The Colombian Caribbean: A Regional History 1870-1950*, Oxford University Press, New York, 1996. Villalón Donoso, Jorge (compilador), *Historia de Barranquilla*, Ediciones Uninorte, Barranquilla, 2000.
- 4) *Memoria de mis putas tristes*, Knopf, Nueva York, 2004, p.41. 以下引用は同書より。翻訳は、木村榮一訳『わが悲しき娼婦たちの思い出』を参照しつつ、大幅に変更している。
- 5) こういった男をラテンアメリカの別の都市にも探することができるだろう。たとえばキューバのクレオール白人都市カマグエイやカルデナスなどが考えられる。